武蔵野日曜集会

○

――ヨハネ伝第８章12～30節――

１９６７年12月10日（武蔵野）
小池辰雄

○は最高の文字　何処から来り何処に往くか　ヨハネとペテロとパウロ　同化作用　信とは突入すること　東方のキリスト教　エンテレケイア　聖霊のバプテスマ　私は父と一緒にいる　去来自在　今の青年は自信過剰　自然的太陽と霊的太陽　その中に入って見る　信知一如、信行円通　十字架の贖罪を抜きにしたらダメ　阿弥陀如来

【ヨハネ８・12～30】

12 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』13 パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』14 イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝らは我が何処より来り、何処に往くを知らず。15 なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。16 されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。17 また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。18 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』19 ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』20 イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

21 斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』22 ユダヤ人ら言う『「わが往く処に汝ら来ること能わず」と云えるは、自殺せんとてか』23 イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。24 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』25 彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。26 われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而

して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』
27これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。28爰(ここ)にイエス言い給
う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫(それ)なるを知り、又わが己によりて何
事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知
らん。29我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適(かな)うことを
行うによりて、我を独りおき給わず』30此等のことを語り給えるとき、多く
の人々イエスを信じたり。

●○は最高の文字

12斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は
暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

この12節は非常に断然たる言葉であります。私はこの8章のところを何回も読んで、これはどうにもならん。それで何と題を付けようかと思ったが、どうも付かない。しょうがないから、「○(まる)」を書いた。あるいは、何も書くまいかとも思ったが、まぁしかし、表現しようとすると「○」になってしまった。「○」を書いてみると、これは実は最高の文字であることを自分で知ったわけです。これ以上の文字がない。未だかつて「○」という文字を――数字はあるかもしれないが――私は27年間この講壇を守ってきましたが、この講壇に「○」を書いたことは一度もない。今日初めてなのであります。早く来た人はその間の消息をお分かりかもしれません。私はここに筆をとってじっと考えて瞑想していたが、どうにもならないので、ここを一遍去ってしまった。そういうことであります。

「われは世の光なり」

と。今度、クリスマスに「世の光」と題してお話することになりますけれども。もう、「われは世の光なり」というこの一言で、これにキリストの一切が表現されている。

「我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」

という。

手島さんが『生命の光』という雑誌を出している。たしかに手島さんは非常に大事なポイントを捕まえている人です。「生命の光」というのは、ちょっと言葉が普通の人にはおかしく感じる。

「生命の光とは何だ、妙なことを言うなぁ」

と。しかし、実にこれも簡単なことで、私たちにとって太陽は生命の光である。これくらいはっきりしたことはない。私たちのこの自然的な生命をあずかっているものはこのお天道さんであります。私は、いい加減な観念信仰よりも、毎朝お天道さんに向かって合掌する人の方が本当だと思っている。日蓮は太平洋からたち昇る太陽を見て、「南無妙法蓮華経」の第一声を旭ヶ丘で放った。私はその丘に行きまして、日蓮の銅像が建っていますが、さ

すがに素晴らしい坊さんだなと思った。

私たちの生命の光は太陽である。これが本当に身体をもって感ぜられている人ならば、このキリストの救いが身体で受けとることができるはずです。それを何のかんのとやっているから、どうも気の毒なことだなぁと思う。いろんなことに毒されている。今の若い人はいかに知識に毒されているか。知識は結構ですよ。けれども、知識万能のようなことになってはいかん。

●何処から来り何処に往くか

13 **パリサイ人ら言う**

「パリサイ人」とか、「教法師」というのはその当時のエリート的な人間です。

『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』

旧約に、

「二人以上の証言でなければ証言とはならない」

ということが書いてあるものだから、キリストは一人で証言しているから「お前、そんなのはダメだ」と、そういう論法でくるわけです。キリストは百もそんなことはご承知です。

14 **イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、**

「私は自分の主観的な自信でもってこの証をしているのではない。自分自身について言っても、それは本当なんだ」

と。いわゆる相対的現実にあるものは自分について大いに自信たっぷりで言ったって、それはダメです。パウロさんが実はそれだった。パリサイ人中のパリサイ人で非常に自信の人だった。

我は何処（いずこ）より来（きた）り何処に往くを知る故なり。汝らは我が何処より来り、何処に往くを知らず。15 なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。16 されど我もし審かば、我が審判は真なり、

こういう言葉が、平面論理で考えたら分からない。

「我は何処から来て何処へ往くかを知っている」

と。ヒルティさんの『幸福論』第一巻の終りの論文がこういう表題であります。人間とは何だろうか。どこから来て、どこへ行くのか。空の星のかなたには誰が住んでいるかと。これが実に痛快な言葉で、

「何処から来り何処に往くか」

と。あの第一の弟子ペテロがローマから去ろうとしているときにキリストが現われた。

「主よ、何処に行き給うか（クオバディス・ドミネ）」

という有名な言葉がありますね。「クオバディス」という有名な小説がありますが。

イエスは上から誕生してきた。霊界からやって来た。即ち、霊界の実在が、絶対界の実

在が相対界に現われた。霊的なロゴスがサルクスとしての、我々と同じ肉体を持った、「肉」と言われるところのイエスという形をとって現われた。これは神学でも何でもない。事実である。それがこのユダヤ人には分かっていないわけです。ただヨセフとマリヤの子だと思っている。しかし、昔の預言者を見てみると、

「自分が生れない先から選ばれていた」

というようなことをエレミヤも言っている。ああいうのが、「発するところが霊界である」ということを示されている魂であります。パウロがローマ書の中でも、

「一切のものは神から出で、神により成り、神に至る」

と言っている。一切のものがですよ。いわんや、この神の子キリストが、

「神より出でて、神に至る」

ことは最も烈しい意味において当然のことである。ところが、このユダヤ人たちは、パリサイ人たちはそいつが分からない。

●ヨハネとペテロとパウロ

ヨハネとペテロとパウロという、この三人のキリストの弟子ですが、ヨハネという人の、一番先に彼の本質を言いたい言葉は何といっても「愛」です。パウロという人間を思うときに一番土台になってはっきりしているのは「信」ということ。ペテロは何かというと、終末的な希望、「望」です。「信・望・愛」とパウロが言いましたが、あのパウロが言った、「信・望・愛」がまさにこの三人の使徒たちの特色を表わしていて、実に不思議だと思います。

その次の特色としては、ヨハネにおいては「生命」です。パウロにおいては「義」であります。ペテロにおいては「畏れ」です。地上にあってもペテロは、救われない前のペテロもキリストに畏れかしこんで、

「どうぞ、私から去ってください」

てなことを言った。

その次にどうしても言わなければならないのは、ヨハネはこの「光」です。あるいは、愛の下にすぐ光を書いてもいいかもしれません。ペテロの方は、畏れのこちら側の状態として、謙遜な「謙」の字ですね。パウロは――パウロはいろなものを持っているから厄介です――信、義、その次は「自由」ですかね。

もちろん、これをその土台においてやっているのが「霊」であります。霊なくして、パウロの信も望も、ヨハネの愛もない。もちろん、この霊は聖霊のこと、キリストの御霊のことです。聖霊が、キリストの霊が基になっている。あるいは源になっている。それが愛と発しようと、望と展開しようと、信と出ようと、みな共通なものを本当に持っている現象にすぎない。

今日の演壇の花は真っ白な菊一色ですけれども、これが色々な色の菊であったとすれば、

無色の太陽の光から色々な色に出ていくと同じように、その意味においては正に栄光なんです。

パウロの方は、義というものが非常に強いから、その反対のものが罪という。生命に対するものは死です。それから、審判（さばき）というものがある。もちろん、すべてにありますよ、パウロにもヨハネにもペテロにも。もちろん、みんなそのような言葉がどれにも出てきます。けれども、その性格的な特色を大まかに言うならばということです。

そして、光に対してヨハネに出てくるのは闇です。闇、世。

「我は世の光なり」

という。この「世」というのは決していい意味ではないですよ。暗い世の中ということ、混沌たる世の中。これは暗世なんだ。

パウロの方は義。罪の方は審判というのがある。そうするとパウロには、どうしても贖いというのが出てくる。だから、十字架が非常に強くなる。ヨハネではあまり十字架ということを言わない。ペテロもあまり十字架ということを言わない。ペテロは、もしかするとヨハネの方に少し近いけれども、ちょうど中間みたいなものだ。パウロは圭角みたいなやつだから、非常に多角的なものをたくさん持っている。パウロにおいて特に感ずるものは何ですか。力です。

「言葉にあらずして、力なり」

という。ヨハネの方では、言なんだ。

「太初に言あり」

という。この「言」というのは、我々が言っているようなそんな言葉ではない。

ペテロの特色としては、特にマイナスの方では患難です。悩みとか苦しみとか言った方がなおいいかもしれない。ペテロというのはその意味において非常に人間的なんだ。それだから波がある。波みたいだ。

パウロははっきりしている。

「我は罪びとの首（かしら）なり」

とか。ヨハネなんかは浸透する方だ。まぁ、そんな感じを読んでいると受ける。あなた方も多分、同感だろうと思います。

「何処に行くかを知る」

という。「知る」という言葉がある。パウロの中にも「知る」という言葉が出てくる。

「聖霊において全てのものを極める」

とコリント書の方でも言っている。同じ知でも、ヨハネの知とパウロの知とはちょっと性格がちがう。ヨハネの方は非常に生命的な知です。

「我は何処より来り何処に往くかを知っている」

と。キリストは教えられて知っているのではない。身体でちゃんと知っている。正に体験

しておられる。彼は実際、何処から来たかということは、父からやって来たんです。また、父の御許に行くということをもう存在的に彼はそれを受けとっている。その存在的に生命的に知っているのがこのヨハネ的な知なんだ。それが旧約でいうとホゼア書です。

●同化作用

汝らは我が何処より来り、何処に往くを知らず。15 なんじらは肉によりて審く、

7章24節にも、

「24 **外貌（うわべ）によりて審くな、正しき審判（さばき）にて審け**」

とある。

我は誰をも審かず。

「もし審くならば神さまの審判は正しいんだが、審かない」

と。この「審かない」という角度は、ヨハネ的な罪の世界の非常に大事な消息です。

たとえば、庭を掘るとミミズがいる。ミミズは陽に照らされると日干しになるから、どんどん土の中に入っていこうとする。モグラは地面の中にもぐってしまう。コウモリはうす暗くならなければ飛ばない。光が来たら逃げていく。フクロウもそんなことです。要するに、夜行性動物とか、隠花植物とかいうものはみんな光を嫌う。嫌って逃げていく。光は闇の中にあるものを逃がそうと思っているのではない。それを本当に光の世界に入れてやろうとするのに、逃げるということは自らの姿を表わしている。自らを審いていることになる。

だから、キリストが「審かない」と仰るのは、

「何も心配いらん。光の中に来てごらん。そうしたら、何のかんのと言っていることはみんな光に化せられていくよ」

と。言い換えると、化学反応なみたいなものです。化せられていく。同化作用です。同化作用をやろうとするのが、ヨハネの伝えているところのキリストの福音であります。

そんなに「罪、罪」と言うなと。へたすると、「罪、罪」と言って――キルケゴールはそれが好きです。みんなキルケゴールにえらくあれするが、私もキルケゴールをもちろん尊重はしますけれども――「死に至る病」とか言ってマイナスの方ばかり見ている。罪を一生懸命に見つめたり、また罪を自分で何とかしようとすると、それは実はサタンの術中にあるんです。サタンというやつはマイナスに興味を持たせようとしている。また、他人のことの陰口を言うのも、これもサタン的な衝動です。人の罪を指摘して、いい気になっているのを「シャーデン・フロイデ」という。何か嫌なことを暴いて、大いに得意になったり、あるいはその人を陥れるような気持でいるような、これはみんなサタンの術中にあって、闇の方へと向かっていくところの衝動である。その人もダメになるし、それを相手にして受けとる人もダメになる。

もし陰で言うならその人の長所を言いなさい、あの人はこういう人であると。たとえその短所のことが話になっても、必ずプラスをもってこれを掩うというのが、これが光の衝動である。光は闇を包んで、闇の世界を光に変えようとする。これが神の子である。それがヨハネ的なものです。審くのではなくして、同化してしまう。それが光の素晴らしいところです。

だから、光は、その意味においては、絶対にこの愛と離すことができない。光の性格は、愛するということと光るということが一つである。そうでなくて、もし、悪を摘発するような意味における光であったら、これは冷たい光です。それは審判の光である。

「我は審かず」

とキリストが言われのは、これを本当に光の世界に入れていこうとする。マイナスを問題としていると、自他共にマイナスの世界に引きずられていく。けれども、プラスを喜び行く人は本当に自他ともにこれを救いの世界に入れていく。救いとは、ヨハネ的にいうと、この同化作用が救いなんです。ヨハネ的な信仰もみなそうなんです。

●信とは突入すること

信ずるとは、

「どうも分からないけれども、仕方がない。行き詰まったから信じよう」

なんていうのではない。

ラテンの神学の祖といわれるテリトリアヌスは、紀元2世紀から3世紀頃の人です。

「我、不合理なるがゆえに、背理なるがゆえに信ず。不可能なるがゆえに真である」

というような有名な言葉を発しました。もちろん、テリトリアヌスのその言葉は非常な真理性を持っています。いわゆる我々の知性の限界の外、その範疇の外、次元の外のことであるから、信ぜざるをえない。我々の理（ことわり）には合わないから、その事態には信ぜざるをえない。しかし、合わないから疑わざるをえないという人はもうそれでお終いです。

たとえば、キリストが五つのパンと二つの魚から五千人の人を飽かしめた。これは全く私たちにとっては理を超えたことであり、また能力を超えたことである。けれども、四つの福音書に書かれ、キリストがそのようなことをしたという報道そのものが偽りでないかぎり、

「キリストなるがゆえに受けとらざるをえない。なんと知らないような素晴らしい世界であろうか」

と言って、自分をそこに全託して、その驚くべき現実の中に自分を投げ入れていく。これが信である。

こっち側にいて、闇の側にいて、光の世界を信じようというようなのは、それは苦しい信仰をやっている。それは本当は信仰ではない。必ずくたびれてしまう。今に嫌になる。

「信ずる」というのは「中に入る」ことなんだから、入れば知ることになる。そして、そこに同化作用を起こしてしまう。だから、信は即ち、まさに突入することだ。信入することだ。信じ受ける、入る、信入する。正に神の世界に信入する。信入すると、そこは光の世界、生命の世界ですから、愛の世界ですから、そこに同化作用が起きて、

「ああ、そういうものか」

と言って、分かるというのは全存在的に分かる。これが知です。これが本当の聖書における「知」なんだ。

パウロだってみんなそうですよ。ただ構造上からパウロはちょっと違うとさっきは言いましたけれども、実はみんな共通なものをもちろん持っている。パウロがしょっちゅう、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と、あれだけパウロも言っている。だから、パウロという人は、表現は非常に多角的な表現をする人だけれども、やはり現実は同じです。ただ表現と、それから人間の性格的な違いがあるだけのはなしです。

●東方のキリスト教

そういうことで、このヨハネ伝のものの言い方がいわゆる三段論法ではない。ということは、いつもその現実の中に同化されながらものを言っているような言い方ですから。そいつをわきまえないと、ヨハネ伝は読めない。しかし、ヨハネ伝がそのように読めてきたら、これはもう本当に何といっても一如の世界です。一如の世界だから、非常に楽になってくる。

ベルジャーエフ（1874～1948）が、

「東方のキリスト教に対する感覚をもっと持たなくてはいかん」

と言った。あれは確かにベルジャーエフのいい警告であります。あなた方、若い人はヒルティとベルジャーエフをしっかり読みなさい。なにしろ、素晴らしい古典的なものを読まないでいて、何のかんのと理屈を述べているからおかしくてしょうがない。まだ認識のことがよく分かってないから、カント哲学を勉強しろと言いたい。まずカント哲学をしっかりやったらいい。科学万能みたいなことを言っているから。そんなことはもうカントがはっきりと「純粋理性批判」でその限界を定めている。

週刊誌ばかり読んでいてはいかんよ（笑）。第一級の古典的なものをそっちのけにして、新しい妙なゆがんだような文学なんか読んでいてはダメですよ。

新渡戸先生という方が一高の校長をしておられたときに――私の兄貴から聞きましたけれども――新渡戸先生は高等学校時代に、どれどれの本を読まなければならないというリストを作られて、これだけのものを基礎として読まなかったならば本当の意味の学問も人間形成も進まないと言う。もっと、若い人はその意味において――それこそ天野先生ではないけれども――教えられる立場を謙虚にとって、やはりしっかり学ばなくてはいかん。

すぐ政治運動に出てみたり、とんでもない。

ベルジャーエフがやはり東方に目を向けたというのは、ヨハネ的な角度の信仰が東方にはだいぶ伝わって、それがやがて景教にきているわけです。あの大乗仏教というのはお釈迦さんのではないですよ。お釈迦さんからずっと後の、あれはちょうどあのテリトリアヌスが出たころだな、竜樹（１５０頃～２５０頃）なんてのが出てきたのは。あの竜樹さんという坊さんは大乗仏教のほとんど元祖みたいなやつです。あれはどこから来たかというと、どうも景教的な、東のキリスト教の影響をかなり受けてやしないかということが言われている。いわば、ヨハネ的なものが影響を与えていやしないかと。大乗仏教の角度というものとヨハネ福音書は非常に性格が似ているわけです。

●エンテレケイア

その意味において、ヨハネというものは――それをむしろ構造的に説明するものはパウロですけれども――端的にその真理をぶちまけているものはヨハネなんです。ヨハネはキリストの懐にいたような、キリストの胸に寄り添うていたような弟子ですから、彼は本当にキリストを身体で受けとっている。

「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りしところの」

なんていう言い方をするところのヨハネ。その「言（ことば）」という。それは言葉ではない。そういった現象体をじかじかに受けている。だから、キリストを飲み、キリストを食らっているような受け方です。これはみな同化作用を起こしている。聖霊的同化作用を起こしている、そういう言です。

私はこの８章を読んでいて、それが響いてくるものだから、これを表現しようがないから、とうとう今日は「〇」になってしまった。空然たるもので、何も書けない。あなた方は勝手に読んでくださいね。名状しがたきところの円現したものです。「エンテレケイア」（現実態、完成態、可能態）という。「エンテレケイア」は、「全き無」「完全に持つ」ということだ。円現という。完全にそこに持っている。そこに具象している。即ち、「〇」は「エンテレケイア」を表わします。大宇宙は、もし表わそうと思ったら仕方がない、こういう「〇」になる。太陽もまたこういう姿をしている。キリストもどうも表現しようがない。角（かど）がない。

ヨハネの「知る」というのは、その中に入って存在的に分かったということ。「テオロギア・ゲルマニカ」という本がある。中世の神秘主義者の最後の方に現われてくる。誰が書いたかわからない。その「テオロギア・ゲルマニカ」という本を書いた神秘家が、

「人間の相対界には全きものはない。全きものでないところの相対的なものは、それは理解されたり、認識されたり、想像されたりする。けれども、全きものは、被造物にはいわゆる理解もされなければ認識もされなければ表現もできない。いわゆる全きもの、キリストのごときひと、父なる神、これは結局何と名づけようかというと、無と

しか名づけられない」

と。こういう面白いことを言っている。

ベルジャーエフが言っているところの、「否定の神学」というのがあります。肯定的な表現では言えないという。最終、最後的なものは、表現できないものだから、こっち側から表現しようとすると、マイナスの言葉でなければ、否定的な言葉でなければ言えない。結局、名づけ難きもの、絶言絶慮であるという。この絶言絶慮の何ものかをはたと存在的に受けとって、以心伝心、以霊伝霊的なものである。何も言わないで、私がO君を見て「そうだっ」というようなことを言う。そうすると、O君は何がそうだか分からない。しかし、その時にO君がまた「そうだっ」と言えば、それは以心伝心している世界です。何とも言わないで、ウワッと電気が通ずるような具合に相答える。

そういうような具合に、ヨハネはキリストの世界に自分を入れて、光を浴びているから、かくのごとき表現ができるんです。

「キリストが、こう言いました」

なんてただ言ってたって、それはひとつも本当の表現にはならない。そのキリストの言葉を伝えながら、ここに脈々と動いているところの何ものかがやはりヨハネの中にもう来ているから。

●聖霊のバプテスマ

だから、分かったでしょ。「審かない」とはどういうことかというと、同化作用をするから審く必要がない。「罪、義」なんて言っている間にもうそこは光の世界になってしまっている。ヨハネ伝では「義」という言葉はほとんど出てこない。「生命」と言ったり、「光」と言ったりしている。これがこの円現をもって表わしたい事態なんです。贖いとか十字架というのは、罪、義という角度の方なんです。

私は十字架を否定しているかというと、決して然らず。もうあなた方がご存じのとおり。パウロの角度からのプロテスタントの表現が、無教会もさんざんそっちだから。けれども、パウロ的表現であろうと、ヨハネ的表現であろうと、ペテロ的表現であろうと、

「はいはい、よろしゅうございます」

と言って楽にこれが受けとれるようにならなければ。御霊が本当に御霊であるならば、必ず楽に受けとれます。自分の性格がどうであろうと。それは素晴らしい。

「でも、私はヨハネ的でなくて、パウロ的だ」

なんて。いいですよ、それで。何でもいい。どうぞ、しかし、常にそれが本ものであっていただきたい。本ものであるためには、何と言おうが、一遍あるところを突破しなくてはいかん。それが聖霊のバプテスマということです。パウロは仕方がない野郎だから――この「全き」でない――とうとうキリストが「お前の□はダメだ」というわけで、ぶち破った。

この「□」を、この「己が義」というやつをぶち破った。そして、今度は別な「□」が来た。これが即ち、

「キリストの義」

とパウロが言ったものです。パウロは義の好きな男だから、

「自分の義はダメだ、今度はキリストの義だ」

と言ったわけです。聖霊の世界は、四角であろうが、三角であろうが、丸であろうが、星の形をしていようが、何でもいい。どれもこれも本ものに現象していきますから。

●私は父と一緒にいる

16 **されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。**

「お前たちは、私を一人と見ているが、私は父と一緒にいるんだよ」

と。この場合の「一緒にいる」ということは、一つになっていることです。二重写しになっている。何処にも遍在するところの神と――彼が天上にいるときであろうと、また今、地上にあるときであろうと――いつも彼は神の前に、神と共に、神のうちにあるわけです。前でもあるし、共でもあるし、内でもあるし、自分の後でもある。何と表現してもいい。そういう何とも言えない共在感、内在感です。そういうようなキリストでありますから、

「私は自分で言ったって、なにも自分で言っているのではないよ。ちゃんと自分の証人がいる。お前たちには見えないかもしれないが、神さまが私の証人だから」

というようなわけです。

17 **また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。** 18 **我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』**

「自分について証をしているのは、これは自分の中にちゃんと聖霊があるから。御霊における証である。父も共に証している。父と私の二人ではないか。お前たちが言う疑問なんか、それで解けてしまったではないか」

と。

19 **ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』**

あいかわらず、そんなことを言っている。「お前さんは、お父さんなんて言うが、それはどこにいるのか」なんて。

イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、

「私が分かっていない。旧約でも、イザヤでも、「父」という言葉があったが、父をも知らない。旧約聖書を読んで、お前さんはイザヤ書を読んだことがあるか。イザヤ書に書いてあるではないか」

と、キリストはここのところで言いたいところです。

我を知りしならば、我が父をも知りしならん』

そしてまた、

「本当に父を知れば、私も分かるだろう。どっちが分かっても、私が分かるはずだ、父が分かるはずだ。こんなに私は「父よ」と言って祈っている人ではないか。いや実に、お父さんとの会話はもうしょっちゅうなんだ」

と。

20 **イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函（さいせんばこ）の傍らにて語り給いしが、**

こんなに非常に具体的なことが書いてあるね。いかにこれが、ヨハネがじかじかに見聞きした人であるか。こういうただひとつの描写でも非常にはっきりしてます。

彼の時いまだ到らぬ故に、

彼が十字架にかけられる時、捕まる時、栄光を受ける時がまだ来ないので、

誰も捕うる者なかりき。

捕らえようとしても、キリストは捕まらん。キリストが彼らに捕まったのは、自分がちゃんともう時を知っておられたから。

「さぁ、捕まえなさい」

と。それまでは捕まらん。これは逃げているのではない。捕まえようとしたって、捕まえられない。彼の不思議な行動、不思議な権威というものに圧倒されているわけです。

私はとにかく福音書を読んでいるときが一番楽しい。いつもキリストにじかじかにお目にかかっているわけですからね。電車の中でもどこでも、福音書を読めば楽しくなる。キリストはなんと自在な人かと。

●去来自在

21 **斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』**

「私は行くよ」と。往生する。往きて生きるという。正にこの往生にあたる。今も生きているけれども、更に往きて生きる。この「往生」というのは素晴らしい言葉です。大往生なんて言うけれども。私はこの往生という言葉が大好きです。私が死んだときには、「往生した」と書いてもらいたい。「逝去、永眠」なんて、私は眠りはしないですよ（笑）。私は往生する。

「往生、万歳！」

とでも書いてもらいたい。ダンテの『神曲』の煉獄篇の中にも「我往く」という言葉がある。

「彼らは何とでも私のことを言わしておけ。私は往くぞ。ゴタゴタ言うやつは言わしておけ。俺はもうどんどん先に往くんだ」

というような言葉がある。

「われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん」

と。行くも帰るも、去来自在なんだ。去るも来るも自在なキリストであります。「我去る」は、また来たらんがためですよ。

「されど己が罪のうちに死なん」

と。ヨハネ伝で、この「罪」というのは七面倒臭いことではない。要するに、

「お前たちは光を嫌って闇にいるが、闇の中で死ぬぞ」

と。即ち、本当に光に来ることをしないで、自己本位な、そして大いに自分をよしとしている、そういうパリサイ人のことを言っているんですから、「汝らは」というのは。

「お前たちは大いに義のつもりでいるが、義ではないんだぞ、罪なんだぞ」

というわけです。パリサイ的な義なんてものは、人の目にはいかにも立派そうに見えるが、とんでもない偽善だと。こういうわけです。

22 **ユダヤ人ら言う『「わが往く処に汝ら来ること能わず」と云えるは、自殺せんとてか』**

とんでもないことを言ったものだ。お前さんは自殺するのかと。とにかく、面白いです、この問答を聞いているとね。まぁあきれた話ですが。

23 **イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。**

非常な対立であります。

「お前たちは土から出でて土に帰るというだけのはなし。世から出て世に帰る。私は霊から出でて霊に帰る。天から、霊界から出でて霊界に昇っていく。けれども、お前さんたちはもちろん素材は土から出たようなものだけれども、お造りになった神さまは、素材は地的なものをもってしたが、しかし、これを天的なものに仕上げていこうとなさっているわけだ」

と。もうこうなったら、どうしたって、ユダヤ人とイエスとは真っ向からの対立になってしまっているわけだ、光と闇との対立に。闇は閉ざしているからいかん。窓を開ければ光が入ってくるのに。もし、私たちが戸を閉めたら、この部屋は真っ暗になる。ところが、戸が開いているから明るい。この部屋はそれ自体なにも明るくはない。光が来ているから明るい。

24 **之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫(それ)なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』**

もう非常に断然たる言葉です。「我の夫(それ)なる」というのはギリシア語では不思議な言い方で、

「エゴ・エイミ」「我である」

ということ。「それ」という言葉はない。

「我であるということを信じないならば。わが実在を、わが実存を受けとらないならば、お前たちはもう死ぬよりかしかたがない」

ということ。

●今の青年は自信過剰

昨日、私に質問した青年も、

「私はとにかく自分でやってみます。何かに頼ることは、なにか卑怯なようで、自分の気持に合いませんから、とにかく自分でやります」

と言うから、

「ああ、やってごらん」

と答えてやった。

「くたびれてしまうけれども、やっぱり、自分でやろうと思う」

なんて、一生懸命にやっている。

みな、ご飯を食べる。しかし、それを本当に自分だけで生産して自分で食べているか。そうじゃない。やはり、いろんなお百姓さんの働きを受け、また、お父さんの世話にもなっている。一体、「これは自分が」というものが一体あるかね、というわけだ。とにかく、何でもお天道さんの光でもって動いているんだ。「自分、自分」というけれども、本当に「これは自分で」というものがあるかと。他から受けないで、一体、自力なんていうのもがありうるかというわけだ。彼はちょっと困っていたけれども。

「君には魂があるか」

「あります」

「魂はどこにあるか」

「わかりません」

「苦しいとか、分からないとかいう、その一番根底なものは何か」

「やはり、何か心とか、魂とかいうものでしょうか」

「魂を持っているということは実は、ある絶対的なものがそこに来ているということなんだ。その絶対的なものを本当に感ずるまでは、魂はどうにもならないように出来ている。そのことを自分で探って、そうだと分かったら、集会に来てもいいがね」

というようなわけです。あの青年はちょっと簡単にはいかないでしょう、おそらく。自信過剰だから。まぁ、ゆっくり待ってます。

「汝ら、もし我の実存を受けとらないならば、まことととして受けなければ、この闇のうちに、罪のうちに死んでしまう」

と。言葉を発しているキリストは、ただの使者でも聖人でもありませんですよ。

文句なしに自分を投げ入れなければダメなんです。

「文句なしに自分を投げ入れるという、このことをしなかったら、いくら聖書を研

究してもダメだ」

と、私が口を酸っぱくして言っているのはそのことなんです。

この「上から来た人」と自ら言い給うところの、霊界から発して来た者が、「受けとれ」と仰るから、彼の中に飛び込んでみればいい。何も難しいことはない。パウロが、

「**十字架を通して**」

という。私もさんざん言っております。十字架の罪の贖いという――命題ではない――事実を本当に受けとれば、そこに聖霊がやってくる。ヨハネではこの十字架という言葉も言わない。

「あるがままにこの光を受けろ、光の中に自分を入れて見ろ。そうしたらば、パウロが言うところの贖いという事態は、贖いから聖化というような事態は、浄化現象をもって起きるぞ」

と。

「ああ、これが贖いというものでしたか」

と後から知ったっていい――というくらいな、私は今日は相当烈しいことを言います――今まで普段言わないようなことを言いますけれども。

「十字架・聖霊のことを先生が言うから」

といって、それをあなた方がいわゆるお題目にしたらダメですよ。ヨハネの角度からでも同じことが起きている。ただ、ヨハネではそういう言葉を使わないだけのはなしです。

●自然的太陽と霊的太陽

今日みたいに素晴らしい光の世界に入ると、あなた方は気分がさわやかでしょ。ところが、雲がかかってると、

「いや、雲のかなたに太陽があるんだよ」

「ああそうですか、それでは信じましょう。雲のかなたに太陽があって、今日は非常に暗いけれども、太陽があるから明るい」

なんてね(笑)。そこに信仰の姿があるんでしょ。それが本当にそうならそれでいいですよね。いいけれども、それはやっぱり、光が来ているから、みんな非常に明るい。

その明るい光は、雲がきて曇るようなそういう太陽じゃないんだ、キリストというのは。どのような環境、どのような運命、どのような状態、心理的状態に自分があろうとも、すべてのそういった相対的なマイナスの事態を突き破ってくるところの素晴らしい光です。その霊光は自然的太陽の光よりかはるかに素晴らしい光です。宇宙線がすべてのものを貫いているというけれども、宇宙線以上の驚くべきものをこの霊光は持っている。そのようなキリストの霊、神の霊が自分を浸透しているのかと。そのことはキリストのこの言葉にぶつかって、言葉ならざる現実にぶつかって、言葉を通して、はたと受けとれば俄然、そ

の中に直ちに入ってしまうではないですか。

何を考えることがあるか。考えることはない。考えるということは自分でそこに戸を、考えという、思いというひとつの重い戸を下ろしている。「我思うゆえに我あり」なんて。

「我思うゆえに我闇のうちにあり」

なんていうことになってしまう、意識過剰でね。闇のうちにあったってしょうがないですよ。

「我、自分を投げ出したり。然るとき即ち、我キリストの光のうちにあり」

と。そうですよ。キリストは審かないんだから。中に入れてしまう。そして同化作用を起こして、

「お前は光である。お前は愛である。お前は生命である」

「はい、そうです。あなたが私の中にいらっしゃったから、私は文句ありません」

と。これが本当の救いの現実なんです。

けれども、それが手放しで、なかなか彼らはできなかった。ヨハネといえどもなかなかできなかった。では、なぜ、できなかったか。それは、キリストが、私たちの知ると知らずにかかわらず、我々のその開けっ放しのできない、投げ込むことのできない世界を全部引き受けてしまったというのが、この十字架という贖いなんです。だから、

「祈って待っていろ、直ちにお前たちの門は開かれないから。思いでもって閉ざしているから、その思いであろうと門であろうと何であろうと、そんな自分が作ったものはみんなすっ飛ばしてしまった。要するに自我というやつはこの十字架ですっ飛ばしてしまった。自我は十字架にかけてしまった。それでもお前たちはダメなんだから。ダメでいいから、あるがままで来なさい」

と。これが、

「あるがままに来なさい」

ということです。あるがままで飛び込んでみたら、そこから全てのことが始まる。同化作用が始まる。キリストの同化作用がこの信の現実であります。

「私の実存を受けとらなければ、罪の中に死んでしまう」

と。そのとおりです。

●その中に入って見る

25 **彼ら言う『なんじは誰なるか』**

お前さんは誰だと。

イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。26 **われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、**

「審くべきこと多し」とあるけれども、言葉というものは、いろいろな場合にいろいろなことを言わなくてはならない。それを一つの平面に持ってくると、あっちは「審かない」と

言っているが、こっちは「審く」と言って矛盾しているではないかなんて、すぐそういうようなことを言うんだね、平べったい頭は。そういうことではない。

而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』

キリストが語ることが、もうひとつ別な言葉でいうと、同時に光が来ているのだから、それを受けとらないと審判になってしまう。それをお前たちが分からないから、私がはっきり言うよと。即ち、はっきり言うことが審くことになるわけです。けれども、それはいわゆる審きるための審判ではありません。

27 **これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。**

あいかわらず悟らない。あきれたね、全く。

28 **爰にイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、**

これも「我であることを」と。もうひとつ言うならば、「我がメシヤであることを」と言ってもいい。自分が本当の救い主、メシヤであることを知る。

又わが己によりて何事をも為さず、

はい、ここでもはっきり言っている。

「自分は何も自分ではしないよ。何も私はしているのではない。私は神さまの手足になっているだけだ」

と。もの凄いことをしている人だけれども。

ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。

だから、キリストは神の中からものを言っておられる。神の中からものをしておられる。神について語っているのではない。神について説明したってどうにもならない。

このことは、さっき言ったヒルティさんも、

「なんとまぁややこしい哲学だの、神学だのがあるか。とんでもない」

ということを言っているでしょ。

「人間が哲学に対して要求しうるところは、哲学がその目的をかなえること、更にある程度まで一般的に解るものであること、生前の最高問題に関する真理と解明とを求める人間の魂の飢えを単に崇高な、従ってあいまいな言葉でごまかさないことである。ところが、こうしたことが神のごときプラトンを始めとして、ヘーゲル、ショーペンハウエルまたニーチェに至るまで、しばしば彼らの本質的な仕事であった」

と。ずいぶんヒルティは烈しい言葉で言ってますが、結局、哲学者が言っていることは言葉の遊戯みたいなもので、ごまかしだと。もちろん、言っていることはごまかしということではない。そういうことを言うことが、人生の本当の真理に対しては残念ながら浮いてしまっているから、いわばごまかしみたいなものだという気持でこのヒルティは言っているんです。ヒルティがいわゆる神学者に嫌われるのはこんなことを言うからです。

我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うに

よりて、我を独りおき給わず』

言うことも為すこともみんなこれは父によっているんだと、さっきから繰り返し、ヨハネも言っているわけです。

けれども、いくらキリストが言われましても、キリストを向こう側にまわして見ているうちは、いつまでたってもこれはダメです。向う側にまわして見たり、判断しているうちはいつまでたってもダメです、その中に入って見るようなことにならなければ。その中に入って判断するようなことにならないことには、これはどうにもならん。「入る」ということが、さっきから言っている「信」の世界だ、そうすると本当の「知」だと言ったでしょ。本当に分かるという世界に入ると言ったでしょ。

●信知一如、信行円通

涅槃経の中にこんな言葉があるそうですね。

「信あって解なければ無明を増長し」

という。信だけがあって理解がなければ無明を増す。

「解あって信なければ邪見を増長する」

と。理解があって信がなければ邪見を増す。

「信解円通してまさに行いの本と為る」

という言葉があるそうです。なかなか面白いと思います。

しかし、この信とか解ということが、実はヨハネは二段構えでなくて、信が本当の中に入って信になると、これが解――解というのは理解すること――知になる。ヨハネでは信知一如であります。信知一如、信行円通というようなわけです。本当の理解というものは、信というのは結局何かというと、その中に入れば御霊が来ますから、聖霊の世界に入ったら、キリストの光は即ち霊の光ですから、霊光でありますから、それはまた霊愛であるわけです。霊的な愛でありますから、もうこの知が即ち霊知であり、またこの解が霊解である。

キリストの霊、神の霊ということをぬきにしては、もう一切のことはごまかしになる。さっきのヒルティではないが、全てごまかしになってしまう。

「魂の世界はごまかしがきかない」

と私が言うのは、この御霊の世界に来て初めて今までの信仰なんてものは何だということが自分で本当に言えるようになるんです。

「『飛び込め、飛び込め』と言うが、先生、どうやって飛び込むんですか」

なんて言うが、それは祈りですよ。祈りが飛び込みです。もうひとつ言うと、祈りとは自分を全託すること、全託するとは祈りなりということ。もう仕方がない、言葉というのは。キリストの懐の中に自分を投げ込むこと、ぶっ倒れることが祈りです。本願の中に自分の悲願をぶちまけることが祈りです。そうして、光の世界に入る。

「ああ、汝は光」

と、この光の世界に入って、霊化される。

●十字架の贖罪を抜きにしたらダメ

ところで、十字架を抜きにしてはいけませんよ、もちろん。ということは、中世の神秘家たちがそれをキリストの教えと受けとって、今度はキリストをそっちのけにして――そっちのけとまでは少し言い過ぎだけれども――そっちのけでなくても、キリストを非常に模範者として、キリストのごとく、

「イミタチオ・クリスティ（キリストに倣いて）」

なんていうあの言葉が表わしているが、「イミタチオ」では本当はいけないんです。

「模範としてキリストは神さまの中にとっぷり入った。私もそのように入ろう」

と、やったのがこの神秘主義の性格なんです。

「一つとなろう」

という、この衝動は非常に大事なことです。「一つ」の世界はそういうものなのだから。非常に大事だからいいのだけれども、キリストがただ模範者であったり、少し影が薄くなったりして、キリストの贖罪がお留守になったらダメです。

私たちの信仰において――さっきの言葉があなた方が誤解しないために私はもう一遍言っておきますが――この十字架の贖罪を抜きにしたら、私たちがいくらこの同化作用を受けようとしたって、受けても、地上でもって同化されない。実は同化作用をして本当の同化作用たらしめるところの根底は、キリストが既にダメなやつを完全に贖いとったということです。この土台があるから、同化作用が本当のものとなる。

そうでなくて、同化作用だけになると、これがいわゆる神人合一的なことになって、うっかりすると今度はサタンの虜（とりこ）になる。

「私は霊的になった。だいぶこれでよさそうだ」

と。自分をよく思ったり、霊的になったというようなことでもって、すっかり輝いてくると、このいわゆる光り輝きが今度はサタンの輝きに変わってしまう。霊的に高慢になったら、これは最大の罪なんです。

そこで、同化作用は私たちにとっては、キリストの十字架の贖いという、キリストが私たちを完全に贖いとったという、自我というものをすっ飛ばしてしまったという、土台があってこそ本ものになる。この罪ということは大事なんだ。ヨハネ伝には「闇」と書いてある。闇と表現されるところの罪というやつは根底的には、実は完全にすっ飛ばしてしまっているんだと。これが贖いです。

けれども、あいかわらず現実の私たちはダメです。しかし、ダメでないこの贖罪の根底があるから、

「さぁ、同化作用を遠慮なく受けなさい。キリストに遠慮なく入りなさい」と。キリストに私たちが遠慮なく同化作用を受けることのできる根底は、「既に贖われている」という、このキリストの贖罪の事態、十字架の事態、それを抜きにしては、ヨハネがいかに地上のキリストと一緒にいたって、懐の中にいたって、胸に寄り添っていたって、ダメなんだから。これはやはり、この十字架を通ったキリストによらなくてはならない。

「私は帰るよ。お前たちは一人も私と一緒に行くわけにいかない。ついて来ようとしたってダメだよ」

と。それはまたやって来るためであった。来らんがためであった。

「また来るよ」

と言う。「如来」という言葉が正にそれにあたる。キリストは如来する人である。この「来」と言うのは何かというと、聖霊をもってやって来る。帰るときには何をもって帰って行ったか。十字架を通って帰って行った。十字架を通ってかれは去って、父の許に行く。また父の許から御霊を持って来た。この道は――

「我は道なり」

とはそのことです――そのような道を受けとるのにまた何の懼れかあらん、また何の躊躇（ちゅうちょ）かあらん。こういうことです。

この同化作用ならどしどし受けてください。そういう意味において、私たちは中世の神秘家とも違う。また現代の観念信仰とも違うゆえんは、使徒的信仰は正にその完全な道を経ているところのものであります。パウロもヨハネもペテロも、彼らはその道を通らなければ、救いのところに、本当に聖霊の救いには入れなかった。それはそうですよ。パウロもペテロもヨハネもこの三人は、どんなにどうであろうとも、全くキリストというこの道、「十字架・復活・聖霊」の道そのものであるところのキリスト、生命そのもの、光そのものであるところのキリストを通って救いの世界に入った。

それで、霊ということが、その意味においては非常に大事なわけです。「霊という事態が、構造が分かった」というだけではダメです。霊の中に入っていかなくてはどうにもならん。

●阿弥陀如来

「如来」という言葉は本来、「カタガータ」という。「阿弥陀如来」というでしょ。「アミッターヤー」という。「アミッツ」というのは「永遠」ということ。「アユス」というのは「生命」。だから、永劫の生命、無量寿のことを「アミッターヤー」という。「アミダブツ」というのだから、無量寿を持った「ブッダ」即ち覚者。「如来」「カタガータ」というのは、「カタ」というのは「如し」という意味、「ガータ」というのは「来る」。「来るが如し」というのは、

「来るが如く、また来らざるが如く」

という、反対がまたそこに含まれるわけだ。だから、「如来」というのは「来るが如く、来

らざるが如く」という意味なんだ。

「風の何処に行きて何処に来るかを知らず。霊もまたかくの如し」

と、キリストの言葉にある。キリストのあの言葉は、

「何処に行きて何処に来るかを知らず」

という言い方は正にこの「如来」と同じことなんだ。来るが如く来らざるが如しと。ところが、イエスは本当に来たんです。本当に来たけれども、それがみんなには分からない。それで、来らざるが如しなんだ。

ヨハネは、しかし、さっきも言ったとおり、

「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りし」

という、そういうじかじかの現実の中に彼はあったので、ヨハネこそ如来を捕まえてしまったんだ。如しでなくて、これは本当に来れる現実を捕まえてしまった。これはもちろん聖霊のヨハネですよ。御霊をいただいたヨハネです。

あの親鸞上人が、

「帰命無量寿如来」

という言葉を言った。無量寿如来に帰命（きみょう）する。命に帰るという素晴らしい字です。

「南無不可思議光」

まことに不可思議な光である。思議すべからざるところの光。帰命するということが即ち「南無」という字の意味を捕まえた言葉です。キリストが

「我は行く」

と言ったでしょ。「我は行く」というのが「南無」の世界なんです。帰命するんです。神さまの中に帰命するのがこの南無という、「我は行く」なんです。

「我は御許（みもと）に行く」

という讃美歌があるね。「いさおなき我を……みもとにわれ行く」という。この「御許に我行く」というのが帰命なんです。これが南無です。「我行く」というのは素晴らしい言葉です。だから、

「信ずるとは我行くこと、われキリストのもとに行くことなり。これ帰命すること、南無することなり。全託合一すること、一如となることなり」

ということです。

実は大乗仏教が、さっきから申し上げているとおり、ヨハネ的な影響が多分あったろうと言われる。しからば、ヨハネ伝というものは、仏教、キリスト教の一番根底の真理を語っている。

まぁ、ブルトマンのヨハネ伝くらいで満足してはとんでもない。もうあなた方は、ヨーロッパの神学なんて、そんなものはなにをかと。もっと仏典を少し勉強して、それから遡って、むしろヨハネ伝をしっかり身につけたらいい。もちろんパウロも大事な要素ではありますが

けれども。パウロはとにかく一切を持っているからね。

なんと私たちは実は素晴らしい世界、光と愛とが一如である、光愛一如のこの帰命の世界に、このキリストと共にわが全ては去来するような人になるか。帰命した姿がこの「エンテレケイア」、この円現の姿で、これが生命であり、光であり、愛であり、もう何とも言えないものである。だから、私がいつかゲーテさんの論文を書いたときも、光（リヒト）、愛（リーベン）、命（レーベン）、そして気（ルフト）。この三つのエルがこの最後のルフトでもって結び合わされる。この三つはキリストの霊気をおびているわけですから。エルの字を四つ並べると、これは十字架の形にもなる。不思議だなと思ったわけです。では、今日はそこまで